



令和3年度 東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

令和4年3月 第12号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

<2月5日の土曜授業は、一斉オンライン授業で実施しました>

堀船中では、全学年一斉のオンライン授業は初めての試みとなるため、スムーズに進むよう準備を重ねてきました。今後起こりうる全校休校等も見据えて、対応可能な体制の構築及び教員の訓練も兼ねています。今回のオンラインの授業に向けて、生徒のみなさんには事前に「学びポケット」で連絡事項を確認してもらいました。さらに、各クラスのGoogleclassroomのMeetで出欠の確認を取った上で、その後、堀船中ホームページに示した時程で授業を行いました。オンライン授業実施後、満足度・感想・改善点などについて生徒にクロームブックでアンケートをとりました。アンケート結果を生かして、さらに精度の高いオンライン授業がいつでもできるように対応してまいります。



<3年生 修学旅行中止となりました>

大変残念ではありますが、2月23日から25日に予定しておりました3年生修学旅行は中止となりました。6月初旬に予定していた修学旅行を9月に延期し、さらに2月末に延期して、なんとか3年生を修学旅行に行かせてあげたいという思いで変更等の手続きを行って参りましたが、最終的には中止という、大変申し訳ない結果となってしまいました。

3年生の皆さんは、修学旅行の学習を何度となく繰り返し、「今度こそは」という期待や楽しみを延期のたびに強くしていたと思います。それを実現してあげることができなくて、ただただ申し訳ない思いでいっぱいです。校医等の関係機関とも相談した結果、現状では、感染の恐れも高く、安心・安全には実施できないと判断し、やむを得ず中止といたしました。保護者の皆さまにも、幾度となくご心配をおかけしたことを深くお詫言申しあげます。

<北区立中学校の3年生は2月14日(月)～19日(土)まで学年閉鎖になりました>

北区立中学校の3年生は、2月14日(月)から2月19日(土)まで学年閉鎖となりました。

入試等、進路選択の大変重要な時期であり、新型コロナウイルスのオミクロン株による感染や濃厚接触のリスクを低減させるため、自宅でオンライン学習を行ってもらいました。3年生が一週間もないととても寂しく感じました。

<防災標語コンクール 1年生大島さん、優秀賞>

1年生の大島さんの防災標語が優秀賞となりました。おめでとうございます。標語は登り旗になって、校内や堀船地域振興室、昭和町地域振興室に掲げられます。

【訓練で 学んだ教訓 行動に】

とっても素敵な標語です。大島さん、本当におめでとうございます。

<人権作文コンテスト東京大会 3年生田村くん、作文委員会賞>

3年生の田村くんが、令和3年度全国中学生人権作文コンテスト東京都大会で作文委員会賞を受賞しました。本当に素晴らしいことです。おめでとうございます。

<酒井監督の講演会 新聞記事に掲載>

2月13日(日)の読売新聞東京版に先日本校で行われた、東洋大学陸上競技部 長距離部門 酒井俊幸監督のリモート講演会の様子が、読売新聞に掲載されました。その後、酒井監督から「生徒のみなさんの感想文を送っていただきまして、ありがとうございました。大事に読ませていただいております。生徒のみなさん、教職員の皆様によろしくお伝えください」と書かれた温かいメッセージが届きました。



北里柴三郎の歩んだ道（1）

北里柴三郎は、阿蘇の山麓の小国郷北里村（現在の熊本県阿蘇郡小国町北里）で代々庄屋を務める北里惟信とその妻・貞のもとに、9人兄弟の長男として、嘉永5年12月20日（新暦1853年1月29日）に生まれました。8歳になると父の姉の嫁ぎ先である橋本家に預けられて四書五経を教わるなど、2年間厳しくしつけられました。10歳の時には今度は母の実家に預けられ、漢籍や国書を4年間学びました。その後、家に戻った北里は、「軍人になりたいので兵学寮（のちの士官学校）への入学したい」と両親に伝えます。しかし両親は北里が軍人になることを許しませんでした。

この頃、熊本藩最後の藩主・細川護久は、家臣たちの将来を案じて、藩内の子どもなら誰でも入学できる学校を建てることを考え、明治4（1871）年2月、熊本城の近くの古城に西洋医学の藩校・古城医学校を新設しました。父・^{これのぶ}惟信は、藩主が開校した古城医学校への入学を勧めて、北里に医者になるよう説きます。しかし北里は「医者にだけはならない」と言い放ち、一步も引き下がりませんでした。これには両親に加えて親戚一同もこぞって反対したため、北里は親の言うことを一旦は聞き入れて、明治4（1871）年、古城医学校（同年7月の廃藩置県により熊本医学校に改称。現在の熊本大学医学部）に入学することになります。ここで初めて北里は医学に触れることになりました。古城医学校は、学費を藩が全額負担するため無料だったこともあり、藩内各地から多くの子ども達が集まりました。全寮制の古城医学校では、生徒は城内にある学校の敷地に建てられた寄宿舎で寝泊まりします。同級生には同郷の藩医の子、緒方正規（後の東京帝国大学医科大学長）もいました。北里は、親の意向で医学校に入学はしたものの、医者になるつもりは毛頭なく、将来に備えてひとまず外国語の勉強に力を注いでいました。そんな北里を医学と結びつけたのは、古城医学校に着任したオランダ人軍医のコンスタン・マンスフェルトでした。

マンスフェルトは北里の学問への熱心さに大変感心していました。ある日、北里はマンスフェルトから将来何になりたいかを尋ねられました。返事に困った北里は、少し考えてから、申し訳なさそうに「軍人になりたい」と答えました。昔から変わらない北里の正直な気持ちだったのです。この時マンスフェルトは、医学も社会に貢献できる重要な勉強なので、語学の勉強と同様におろそかにせず精進するよう話しました。そんな北里に転機が訪れます。オランダで発明されたという顕微鏡を覗いた時のことでした。何気なく機器の上のレンズに目をあてがうと、球形や円筒形など、様々な形をしたバクテリアがたくさん動き回っていたのです。生まれて初めて目の当たりにした不思議な光景に、北里は目を輝かせました。顕微鏡の中に未知の世界があることを知り、その素晴らしさに魅せられた北里は、ついに医学に興味を抱くようになります。語学の勉強とともに、医学の勉強にも熱心に取り組み始めたのです。そんな北里をマンスフェルトは助手に抜擢し、解剖学、組織学、顕微鏡学、生理学、病理総論等の授業の通訳を任せます。これにより北里の語学と医学の知識はみるみる向上していきました。熊本医学校での任期を終えたマンスフェルトは、北里に、「もし君が医学の道を進むのであれば、郷里を出て東京の医学校に進み、卒業したら、さらに国を出てヨーロッパに留学しなさい」と助言をし、別れを惜しみながら去って行きました。

北里はマンスフェルトの勧めに従い、郷里を出て、明治7（1874）年11月、東京の神田区泉町の東京医学校（明治10年に東京大学医学部に改称）に入学します。熊本医学校で同級だった緒方正規は途中で東京医学校に転入していたため、緒方に3年遅れての入学でした。

恩師・マンスフェルトとの出会いにより、軍人に憧れた一人の青年は、世界中の多くの人類を感染症から救う「日本近代医学の父」へと歩み出していくのです。



北里柴三郎の生家
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室



熊本医学校時代
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室



教師マンスフェルト先生
マンスフェルト
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室